

桧垣 淳三 氏

城東刺繍 代表

桧垣 美賀子 氏



桧垣淳三氏（左）、桧垣美賀子氏（右）



タオルに刺繍。たちまち特別感を醸し出す魔法のような加工。今回の「タオルびと」は今治で比較的早くにタオル専用の刺繍加工業を始めた城東刺繍の桧垣淳三氏・美賀子氏夫妻である。タオルの刺繍一筋に約半世紀にわたって、さまざまな色の紋様や文字をタオルに施してきた。長年にわたる誠実な仕事ぶりはタオル業界が認めるところであり、信頼は厚い。コロナ禍で影響は受けたものの、創業以来「営業なし」で商売をつづけている。それは、ひとえに城東刺繍の作品が天下一品だからである。

---

ひがき・じゅんそう ☆ 1947年3月、愛媛県越智郡朝倉村（現・今治市）生まれ。今治市立城東小学校、今治市立美須賀中学校をへて、1962年4月に愛媛県立今治工業高等学校機械科に入学。同校を卒業後、矢野鉄工所に入社。その後、造船の「組」を形成し船づくりに携わり、1976年に29歳で城東刺繍を創業。趣味は溪流釣り。

ひがき・みかこ ☆ 1951年5月、愛媛県今治市横田町生まれ。今治市立立花小学校、今治市立立花中学校をへて、1967年4月に愛媛県今治北高等学校に入学。同校を卒業後、専門学校に通うが22歳で淳三氏と結婚。城東刺繍創業から淳三氏と二人三脚で事業を支える。趣味はゴルフ。

## 1. 幼少時代

### ハンターとおてんば娘

桧垣淳三氏は、1947年3月25日に越智郡朝倉村に生まれた。父・武<sup>たけし</sup>氏は縫製職人で小さな縫製工場を営み、母・文子氏はタオルのヘム縫いをしていたため、淳三氏は幼少の頃から織物に縁があった。兄弟は、長兄の正氏、次兄の桂<sup>けい</sup>氏、長姉の久子氏がおり、淳三氏は4人兄弟の末っ子である。

淳三氏は、1953年4月に今治市立美須賀小学校に入学し、2年生まで在籍したが、3年生からは新しく創設された今治市立城東小学校（2015年3月廃校）に転学した。この転学には、戦後のベビーブームで子供の数が急増し、既存の小学校のみでは子供たちを収容しきれなかったことが背景にある。淳三氏は、同校を卒業後、1959年4月に今治市立美須賀中学校に入学した。小学校・中学校時代は、友だちと川で魚を獲りに行き、外でよく遊んだものである。「昔から魚を獲ったり、何かを捕まえるのが好きでね」と言う淳三氏は、幼い頃からハンターとしての片鱗を見せていた。そして、大人になってからはアマチュア「猟師・漁師」の異名を持つほどの腕前になり、淳三氏の生涯の趣味となった。

淳三氏は、自動車に興味があったこともあり、中学を卒業後1962年4月に愛媛県立今治工業高等学校機械科に入学した。戦後、日本は大量生産体制のもとでモノづくりをおこない、とくに自動車産業では旺盛な国内需要と輸出によって1960年代をとおして自動車の生産台数が急速に増加した。淳三氏が高校に入学した翌年の1963年には、日本の自動車生産台数は100万台を超え、1967年には約315万台以上となり、アメリカに次いで世界第2位となった（石川和男〔2008〕34頁）。まさに自動車ブームの最中に、淳三氏はエンジニアとしての知識を得るために機械科に入学した。このときはタオルに興味はなく、機械科での学習を終えると1965年4月に建

築用資材を製造する矢野鉄工所に入社した。


鉄工所に勤めはじめた頃から、ハンターとしての本領が発揮される。20歳で免許を取得してキジや山鳥の狩猟を始め、25歳で溪流釣りを始めた。鳥猟は、近所に住んでいたおじさんの影響で興味を持ったのが最初である。溪流釣りの魅力に引き込まれたきっかけは、鉄工所の同僚に誘われて行った松茸採りである。淳三氏は、山に生えた松茸よりも蒼社川で泳ぐ魚に興味をそそられた。同僚の「ここには大きな魚がおるんよ」とふと発した一言が脳裏から離れず、年明けに蒼社川へ釣りに行った。すると、一匹も釣れない。これが返って淳三氏のハンターの心をくすぐった。急いで溪流釣りの入門書の本屋へ買いに行き、元々読書好きだったこともあり、むさぶるように耽読した。こうして、20代から「ハンター」の沼にはまっていた。

さて、美賀子氏の話に移そう。美賀子氏は、1951年5月8日に今治市横田町で父・房一氏と母・ミユキ氏の間で3人兄弟の長女として生まれた。下には長男の栄治氏と次女の生美<sup>なるみ</sup>氏がいる。両親とも地元出身者であり、農業を営んでいた。

美賀子氏は、今治市立立花小学校をへて1964年4月に今治市立立花中学校に入学した。活発でおてんばな幼少時代を過ごし、中学校からはバスケットボール部に所属した。実は、美賀子氏が中学校に入った頃、バスケットボールは目新しいスポーツであり、部活動の競技にはなかった。当時の花形スポーツは、室内競技では器械体操、室外競技では野球という時代である。そこで、美賀子氏は友だちとバスケットボール部を新しく立ち上げ、立花中学校に初めてバスケットボールを持ち込んだ。

その後、1967年4月に愛媛県立今治北高等学校に進学し、ここでも最初のうちはバスケットボールに打ち込んだが、やり切った感があって潔く辞め、将来のことを考えるようになった。美賀子氏は、高校を卒業して1970年4月に専門学校に入学したが、このタイミングで淳三氏と出会い、22歳で結婚した。

## 2. タオルとの出会い

淳三氏は、矢野鉄工所に勤務したのち、鉄工所で築き上げた技術を生かして波止浜造船  の下請けの仕事に就いた。今治の地は造船の町としても歴史がある。造船は分業によってつくられており、造船会社の内製化率は比較的低く、多くの作業が船用工業メーカーと呼ばれる多様な取引先があり、社内外注されている。主な作業に溶接、塗装、艀装などがある。淳三氏の場合、数名と「組」を形成して、波方で溶接工程を請け負っていた。ただ、1973年の石油危機によって造船需要が減退し、不況対策の時代に突入した。設備や人員の合理化が進められ、建造能力は半減した。これを機に、淳三氏は造船の仕事に見切りをつけることを決めた。

## 長兄の一言、そして起業

淳三氏は、独立して鉄工所を立ち上げようと考えていたが、1976年の29歳のときにタオル専門の刺繍加工の事業を起した。それまでタオルとはまったく縁のない仕事をしてきた淳三氏が、なぜ転じてタオル専用の刺繍加工業を創業したのか。

この選択に影響を与えたのが12歳上の長兄・正氏である。正氏はタオル関係の仕事をしており、淳三氏に「刺繍を研究してタオル専用の刺繍やらんか」と進言したのだ。当時、今治にはタオル専用の刺繍加工業者が少なく、タオルメーカーはわざわざ岡山県の業者に依頼していた。父の武氏も「そしたら知り合いの刺繍屋を紹介しちゃう」ということになり、トントン拍子で刺繍加工の仕事スタートさせる運びとなった。

城東刺繍の名前は淳三氏が名付けたものであるが、今治城の東に位置し、城東小学校の隣で事業をスタートさせたことから「城東」

と命名した。現在の東門町4丁目あたりである。1990年に美賀子氏の生まれた横田町に工場は移転しているが、東門町が城東刺繍の発祥の地である。



城東刺繍の事務所兼工場の外観（2022年7月撮影）

起業して最初に取り扱ったタオルメーカーは、今でも得意先として付き合いのある（株）上脇である。上脇は、1964年設立の半世紀以上つづくタオルメーカーであり、「ガーゼ多重織り」で特許を取得したり、「超広幅ジャカード織機」を独自で開発したり、つねに新しいことに挑戦している。城東刺繍と上脇は仕事上で堅固なネットワークを築いているが、上脇の代表取締役・上脇純子氏と美賀子氏は女性同士、ゴルフ好きのグルメ同士、若い頃から強固なつながりがある。

タオル製造がピークに達した1980年代、1990年代は産地内の多くのタオルメーカーと取引があったが、現在は上脇以外に10社ほどのタオルメーカーと仕事をしている。城東刺繍は、産地内取引にこだわり、創業から現在に至るまで今治タオル工業を支えている。

## 人生のターニングポイント、結婚

淳三氏と美賀子氏が出会ったのは、美賀子氏がまだ専門学校の学

生で、淳三氏は「組」で造船の溶接に従事していたときである。ほどなく、二人は1975年4月13日に結婚した。淳三氏が起業する2年前である。淳三氏の起業の話は美賀子氏にとって寝耳に水であったが、美賀子氏の根っからの明るさと前向きな姿勢は城東刺繍の発展の歴史に欠かせない。美賀子氏は、カネのマネジメントのみならず、ヒトとモノのマネジメントも率先しておこなってきた。二人の名刺に肩書きがないのは、二人揃って城東刺繍の代表であり、経営者であり、そして技術者であるからだ。

城東刺繍の創業から約20年間、タオル業界の信頼を得ながら商売は順調に推移したが、拡大路線を選択せず、二人で事業を切り盛りしてきた。その後のタオル業界の不況も二人三脚で切り抜け、現在に至っている。

（次号につづく）

